ニッポン名城技めぐり

城から学べる
“Construction”

Vol.06

豊臣政権時代 ▶ 徳川政権時代（慶長年間） ▶ 徳川政権時代（元和年間以降） ▶ 幕末

関ヶ原の戦い以降、大名の配置換えを機に起きた“築城ブーム”で城造りの技術が飛躍的に向上

名古屋城

所在地	愛知県名古屋市
築城年	1610（慶長15）年
築城主	徳川家康
保存状態	1945年の名古屋大空襲で大天守・小天守・本丸御殿などが焼失。戦後、天守は1959年に鉄筋コンクリート造で再建された。

公儀普請で建てられた「抑止力」の城

名古屋城は、徳川家康が九男・義直（尾張徳川家の初代藩主）の居城として築いた城である。当時は大坂の役（1614～1615年）直前で、徳川・豊臣間の緊張が高まっていた時期。築城の直接の目的は豊臣との再決戦に備えた軍事拠点の構築だが、豊臣恩顧の大名を動員してつくらせることによって（公儀普請、天下普請とも）、彼ら自身に「名古屋城の強大さ」を知らしめることも家康の狙いだったとされる。当時の大坂城を大きく上回る巨大城郭に高性能な石落とし、緻密に計算された構造などが諸大名の知るところとなり、「攻める気すら起こさせない」抑止力の城が完成した。

天守の2階にある出窓。「出窓の下には石落としがある」ということが敵にわかるように、入母屋造りの屋根でわざわざ目立たせており、これも「抑止力」の一つといえる。

続きは動画をチェック!

日本の建築史を専門とする広島大学名誉教授・三浦正幸教授の解説動画をこちらからご覧いただけます。

三浦正幸教授…東京大学工学部建築学科卒。建築学者、工学博士、一級建築士。NHK大河ドラマの建築考証担当、城郭や社寺建築に関する著書多数。